
10代ボンゴレファミリー解散？！

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10代ボンゴレファミリー解散？！

【Nコード】

N4318V

【作者名】

M3

【あらすじ】

…夢をみた…彼はほんとうに、あのボンゴレ？世なのか？
10代ボンゴレファミリーに過去最大の危機が迫る！！

ボンゴレファミリー（前書き）

私の第1作目「ボンゴレ？世の決意」の続きとしてみてもいいですし、新しくみて頂いてもOK！（ ）任せます。

これを見てきっかけに、作品の数々をみて頂けたらこれ幸いです！
ではどうぞ！（030）／

ボンゴレファミリー

巨大マフィア「ボンゴレ」

その10代目ボンゴレファミリーのボスが沢田綱吉という青年だ。普段は弱々しく虫も殺せない頼りない、優柔不断な彼だが………並盛のため、仲間のため、ひとたび死ぬ気のオレンジの炎を額・手の甲に宿すと敵なしの強い力を持つ

ボンゴレ？^{デーチモ}世は、眉間にシワを寄せ、祈るように拳をふるう

温かく仲間を包む大空

これが沢田綱吉という男だ。

そんな、ボス・沢田綱吉を守る優秀な守護者達も、代々ボンゴレは受け継がれている。

常に攻撃の核となり、止まることのない怒濤の攻撃…嵐の守護者獄寺隼人。彼は沢田綱吉の右腕でもある

すべてを洗い流す鎮静の雨、剣豪…雨の守護者 山本武

ファミリーを明るく照らす日輪…晴の守護者 笹川了平

決して誰とも馴れ合わない孤高の浮き雲…雲の守護者 雲雀恭弥
彼はボンゴレ最強の守護者ともうたわれている

臆病者だが、激しい一撃を秘めた雷電、雷の守護者ランボ

嘘の中に潜む真実、真実の中に潜む嘘…実体のつかめぬ幻影、霧の
守護者 六道骸

これが、10代ボンゴレファミリーである。

初代ボンゴレファミリーボス・ボンゴレ？世ジヨットと似ている沢
田綱吉だが、獄寺をはじめとする守護者達も、初代各守護者に類似
している。初代ボンゴレファミリーの再来かとも言われている……。

正式に継承した当初こそ、平和主義者の沢田綱吉に反感をかうものは多かったが、守護者達がうまくまとめ上げてきた……

10代ボンゴレファミリーの絆は強い！

周りは完全に彼らの力に魅力されていた…彼らこそ、“過去ボンゴレ最強ファミリー”だと、

そう思っていた…

日常

「ツつくん！」

「ツナさん！」

「京子ちゃん！ハルも、久しぶりだね。」

「ツつくん久しぶり！日本に帰って来てたんだね！」

「うん。2人とも高校の帰り？」

「はい！これからケーキ食べに行くんです！」

「あははは…相変わらずだね」

ツナたちも並盛中を卒業し、高校生になった。今は冬のため、高校2年とももうすぐさよならになる。

ツナたちはボンゴレのこともあるため、平日日中は学校、休日はほとんどボンゴレのことで忙しい。ツナの希望で、10代ボンゴレファミリーの拠点は並盛になっているため、休日はイタリアにあるボンゴレ本部に、ローテーションで様子を見に行くことになっている。今回はツナだったのだ。

「お兄ちゃんが、日本に帰ってきたらアジトにきてくれて言ってくたよ?」

「そっか!わかった。ありがとう。京子ちゃん」

「ツナさん!行ってらっしゃいです!」

「頑張ってね!ツツくん」

「うん。またね」

「お帰りなさい。十代目。」

「ツナ、お疲れさん！」

「うん。ただいま……地下アジトの工事かなり進んできたね！」

「再来年頃にはほぼ完成が予定されてるそうです。」

「そう。楽しみだな」

「沢田、京子に会ったのか」

「はい。たまたま道端でバッタリだったんですけど……話があるとか」

「おう！そうだった。雲雀の部屋に行くぞ」

「雲雀さんの部屋に？」

日常？

雲雀の部屋

.....

「雲雀！入るぞ！」

「.....。」

「こんにちは。雲雀さん」

「やあ。沢田綱吉」

「話ってなんですか？」

「休日にローテーションでいま本部を見に行ってるけど、もうやる
必要ないから」

「え？」

「なんでだ？」

「それはだな！山本、“俺達”がこれから本部を見れるようになるからだ！」

「俺達つて、お前と雲雀がか？」

「そつだよ。獄寺隼人」

「そうか！獄寺くん、2人とも高校卒業だから…」

「?!」

そう、次の春でツナ達は高校3年生になる。世は受験生というものだが、ボンゴレのことがあるツナ達は大学受験をしない。事実上、ボンゴレという名のマフィアに就職ということになる……。

雲雀と了平はツナ達の一つ上のため、今年で高校卒業という形になる。学生でなくなるため、自由にボンゴレ本部に足を運べるということだ。

「極限！ボンゴレ本部は俺と雲雀に任せて、お前達は残り1年の高校生活を楽しんでおけ！」

「ありがとうございます。けど、雲雀さんもお兄さんも大学はいいんですか？ボンゴレに気を遣ってるようなら…」

「俺の頭じゃどうせ極限どこも行けんからな」

『この人言い切っちゃったよ！』

「大学なんて…人が群れかえってる中になんでわざわざ自分から行かなきゃいけないの」

『この人相変わらずだな！』

「そうですか。じゃ、これから本部は任せます。よろしく願います！……………そういえば、骸は？」

「ああ、極限寝てるらしい」

「骸寝てるの?!まだ夕方だよ?!早くない?!」

「早いんじゃないかって遅いんだよ」

「?..?」

「どうやら骸のやつ、朝と夜がひっくり返ってるらしいぞ」

「あははは！ホントにムクロウになっちまったのな」

「……うまくねーよ」

「でも、なんで？夜に何やってるんだろ、骸の奴…なんか、調べてんのかな…」

——「コンコン」

「骸、骸。」

「…ん……沢田綱吉ですか？」

「うん、俺だよ。骸、今入って大丈夫か？」

「…どうぞ」

「すみませんね。こんな格好で」

「いや…こっちこそ寝てるときにごめん。お兄さんから、骸の生活が朝と夜逆転してるって聞いたから…」

「…ええ、まあ…」

「1人であまり無茶しないで。…なんか力にならないか？」

夢

「クフフ…そのような心配は無用ですよ、沢田綱吉。これは僕個人が好きで動いていること……あなたには関係ありません」

「そうか。わかった！じゃ何も突っ込まないから……なにかあったらいつでも言って」

「……………ええ。分かりました」

「じゃ、お休み」

~~~~~

んな  
.....  
み、  
んな  
.....  
.

ツナ  
…

じゅ  
…  
十代目  
…

沢田！

沢田綱吉

.....  
。

早くっ！お…俺、を…早くっ

倒せ！

何を……

十代目！な、

?!

俺を……倒せ!……早くっ!!

何言っ  
てんだよ!ツナ…!

山  
本

獄  
寺

もう……い、やなんだ……俺を……早く！

骸

雲雀

ランボ

笹川

早くっ！俺、を！……………殺し……………

ガバッ

「「「「「？！」「」「」

「……………なんて夢だ……………」

「ツナ……？」

「今の夢はなんだ？」

「……………」

「……………」嫌な予感がしますね……………」



## 予兆

「今朝の夢はなんだっ たんだ…」

嵐の守護者、獄寺隼人は今朝見た夢のせいで早く起きてしまった…  
しかも、目覚めも悪い。重い瞼をあけて、いつものミーティング室  
の扉を開ける。するとそこには……

「おっす！獄寺。」

「山本！早いじゃねーか」

「俺だけじゃないさ…」

「?!」

辺りを見ると、了平、雲雀、骸までもいる。これはどういつことなの  
のか…

「なんで…」

「君も見たんでしょう？獄寺隼人……あの夢」

「?!雲雀…」

「獄寺、ここにいる全員見ているのだ…」

「しかも、全く同じ夢らしいぜ」

「っ!…」

「ここにいないということは、沢田綱吉は見ていないらしいですがね……」

「守護者だけってことか……」

「どう思ってたんだ？獄寺」

「……………。なにかが起こるのだけは確かだ」

「クフフ……同感です。これは予兆ですね」

「骸……」

「君たちだけならともかく、術士のこの僕の眠りを妨げる夢を見させたのです……気に入りませんね……ただせさえ最近睡眠不足だといふのに」

「それは貴様の都合だろう。骸」

「聞き捨てならないね……僕だって途中で起こされて機嫌が悪いんだ。」

「雲雀……お前はいつもだろ……」

「骸、術士だというなら……今回のこの俺達の見た夢、どうみる。」

「クフフ……。いつになく落ち着いてますね……獄寺隼人。……意図的に“何者”が見せているにまず間違いないでしょうね」

「その“何者”が誰かわからんのか？骸」

「……………」。

「骸……………」

「…………… 此処だけの話をしましょう。」

## 霧の守護者

「実は最近妙な噂があります」

「「「「？」」「」」」

「“霧の属性集団”が動いている…と。」

「「「は？」」「」」

獄寺と山本、了平は思わずひよんな声を出してしまった。…霧の属性集団って…

「これはそんな簡単な話ではありませんよ」

「お…おう。すまん…ついな」

「全員が霧の使いのスペシャリスト…そんな集団が、いま少しずつですが他のマフィアを荒らしていると聞きます。」

「なに?!」

「やっぱり霧の術士は嫌いだな。」

「おやおや、雲雀恭弥…この僕に喧嘩をうっているのですか?」

「やるのかい? いいよ…噛み殺してあげる」

「おい雲雀…話を反らすなよ! 骸、続き続き!」

山本はすぐさま体裁に入る。さすがは鎮静を特徴とする雨の守護者…

「クフフ…いいでしょう。その霧の術士集団の狙いは定かではありませんが、分かっていることが1つ」

「「「?」」」

「必ず、大空の属性が狙われていることです」

「なっ！大空……」

「っ！！十代目……」

「そう、沢田綱吉は大空の属性、しかも初代ボンゴレ？世の血を濃く受け継いだけあってその質は高い。」

「なんと！沢田の危機ではないか！」

「…骸。」

「？」

「霧の属性集団についてもっと詳しく調べてくれ……お前のことだ、向こう側に感づかれるなんてヘマしねーだろ。」

「クフフ…。みくびらないで頂きたいですね…いいでしょう。獄寺隼人。」

「やけに素直ではないか。骸。」

「クフフ…。彼らのせいで霧の術士に汚名付けさせられては適いませんからね…。今回は力を貸しましょう。」

「頼む。……俺達は何もするな、下手に動いて骸の邪魔したくね！」

「OK！」

「うむ」

「それから雲雀」

「……………」

「並盛の監視の強化だ」

「……………君に言われるまでもない」

「俺達は十代目の護衛だ。十代目に余計な不安は与えないからな、内密に動け」

「おい…獄寺…沢田に感づかれないするなんてかなり難易度高いぞ」

「相手は超直感の持ち主だぜ！」

「つべこべ言つな！」

「……各自やることやれよ！解散だ」

## 連絡

「ん~~~~」

「どうかしましたか？十代目。」

「なんか……みんな、かたくない？」

「そうか？」

「極限気のせいだ！沢田！」

「そうかな？せつかくの昼食が……なんか……」

「わりいツナ！俺ちよつと出てくるわ！」

「え？！山本？！うん……行ってらっしゃい」

「つたく、忙しいヤローだ」

「まあまあ獄寺くん。……そういえば、最近さらに骸見なくなつた

ね。雲雀さんまで」

「む、骸は黒曜らしいですよ？十代目。」

「そうなんだ。」

「雲雀の奴はどうせ並盛を歩き回ってますよ」

「あははは。みんな忙しいなあ〜」

「十代目はゆっくりなさって下さい」

「うむ、極限！周りのことは俺達に任せておけ！」

「うん。ありがとう！」

りのー…

♪ みーどーりーたなーびくーなーみもー

「僕だけど」

『 』

「……うるさいな。いいから僕が言ったこと進めといてよ……“彼”  
曰わく時間ないらしいから」

『  
』

「さあ？知らないよ。そんなこと。僕は霧の術士集団を噛み殺せればいいんだから」

『  
』

「切るよ。忙しいんだ」

「もしもし……骸か、どうだ？」

『クフフ…さすがは霧の術士のスペシャリスト達、といったところですかね。ガードがかたいですよ』

「そうか…まだ時間かかりそうか？」

『かかりますね。もう一週間ほど…ですか』

「構わねーさ。とにかく、土産さえあればな。慎重に頼む」

『分かりました』

「ったく…めんどくせー」ってなってるやがった

## シックファミリー

「まさか尻尾も出してこないとは…ナメてましたね、霧の属性集団を」

六道骸は獄寺隼人の依頼で霧の属性集団について調べていた…しかし、彼らの有力な情報はなかなか得られず、時間だけが過ぎていき、さすがの六道骸にも焦りが出始めていた…

「霧のスペシャリスト…ですかね…」

六道骸とお見受けする

?!

はじめまして…我々の名は

霧の属性集団“シックファミリー”

「……………おやおや、そちらから出て来てくれるとは、願ったり叶ったりですね……………」

なるほど…ボンゴレ10代霧の守護者、六道骸。噂通りの術士だ

「クフフ…お褒めの言葉は光栄ですが…そちらからわざわざこの僕に何の用ですか？」

我々と共に手を取らないか？六道骸

?!

我々は強い霧の属性の術士を集めている。  
六道骸よ、貴様ほどの力を持つ術士がボンゴレなどにくすぶっているのは勿体無い……そうは思わないかい？

「クフフ…僕はボンゴレに取り込んでいるわけではありませんよ。  
それに、何処にしよう……この僕の霧の力は変わりません」

貴様の霧の力…素晴らしいものだ。我々の上に行く！だが、ボンゴレにいては宝の持ち腐れ…我々と組めば、我々は貴様の下につくつもりだ。

「クフフフ…ハハハハッ！まさか霧の属性集団シッケファミリーとやらに勧誘されるとは思いませんでしたよ…実に面白い話だ」

どうする…六道骸よ。

「お断りしますね」

ほう…

「僕があなた方について、あなた方にはメリットがあるでしょうが、

僕にはない」

…メリットならある

?!

我々と共に、沢田綱吉を殺す

？

そして、沢田綱吉を砕いたあかつきには……巨大な霧の力を出  
来る

「巨大な霧の力……ですか」

そうだ……全てのものを屈せられる巨大な力だ  
……共に組み、沢田綱吉を撃とう！六道骸よ……

……。



## 霧と雲

「やれやれ…厄介なことになりましたね」

六道骸は追い求めていた霧の属性集団、名を“シックファミリー”と交わした最後の会話を思い出していた。

.....

これ以上のことは貴様が我々と組んだら話そう。

「僕からボンゴレ側に漏れるとは思っていないのですか」

その心配はいらない。貴様があくまでボンゴレ側につくのなら、我々は我々のやり方で必ずや沢田綱吉を殺す。  
そして得られた新たな霧の力によって、世のマフィア全て潰し、マフィアの頂点にたつだけだ。

「言ってくれますね」

ゆるりと考える…六道骸よ…貴様の力が最も発揮される場所を。我々はいつでも歓迎する……

……

「はあ…なんてめんどくさい」

骸は千種のような言葉を吐きつつ、アジトに帰ってきた。

「骸！」

「?!……………沢田綱吉」

「どうしたんだよ！？こんな夜遅くまで」

「あなたこそ、こんな時間まで1人アジトで何してるんです？」

「いや……みんな出掛けちゃってさ……骸なんか知ってる？なんか重要なこと隠してるっぽくて」

『ボンゴレの超直感ですか……』

「僕は知りませんよ……」

「そうか……困ったな……あのお兄さんや山本の忙しそうなお様子見るとただことにみえなくてさ。」

『あの2人は……素直過ぎも困りものですね』

「仮にもし、何かあったとしても、みなあなたに不安をかけまいとしているのでは？」

「そうかな……みんなで解決しちゃったら、俺いる意味なくなるよ」

「……理解できませんね。組織の上に立つものは下の者に任せてい

ればいい…。あなたは獄寺隼人たちの結果を聞けばよいだけだとい  
うのに…」

「いつも言ってるだろ。俺はボスとか上の人間とかになつたつもり  
ないんだってばっ…！いつだってみんなと同じ位置で見て、感じて、  
動きたいんだ…！じゃないと、みんなと壁作ってるみたいじゃないか」

「……………」

「ねえ」

「「?!」」

「もういいかな。話があるんだけど」

「ひ、雲雀さん！」

「話とはどっちにですか？」

「キミにだよ。六道骸」

「あ、じ・じゃあ俺は自分の部屋行ってますから」

「で。話とは何ですか？珍しい」

「キミも会ったんじゃないかと思ってね」

「？」

「シックファミリー」

「?!」

「やはりね」

「クフフ…あなたからその言葉が出てくるとは。」

「並盛見回つてるときバツタリね」

「…友人とバツタリ感覚ですか」

「シックファミリーに入らないかとね」

「10年後のあなたは確か少し霧の属性も入っていましたね」

「みたいだけど、今は試したこともないし分からないな」

「あなたはボンゴレ最強の守護者と名で知られています……………おそらくたとえ微量であっても、霧の属性を持つ強い者は取り入れるつもりなのでしょうが……………」

「冗談じゃないよ…噛み殺してやろうかと思った、逃げられたけど……………」

「……………彼らは雲雀恭弥という人間を分かっていますね」

「弱い奴ほど群を成す…彼らも大したことないな…拍子抜けだよ。」

「雲雀恭弥。話はそれだけではないでしょう？」

「ああ。彼らの言ってた巨大な霧の力とやらだけど」

「心当たりが？」

「“大空”が開ける霧のボックス兵器があるらしい」

## 大空と霧

「クフフ…霧のボックスを大空があげるとは……面白い。」

「そのボックスを開発したのは、3人の研究者のうち誰か分からない…謎に包まれてるボックスらしい。中身も不明」

「ただ一つ、そのボックスは霧なのにも関わらず大空の属性が必要不可欠だと…」

「らしいね。2段階で開くボックスらしい…第1段階は霧、第2段階で大空」

「巨大な霧の力というのは、大空の属性で開けた場合のものだということですかね」

「たぶんね」

「しかし、よくまあ……そんなことよく調べましたね」

「ボックスのことは少し前からだから。そんな噂を耳にただけさ」

「けど…噂だけでないと」

「現に彼らの存在がね」

「同感です」

「どうするの」

「……………」。

「……………」なに」

「あなたからこの僕にそう聞いてくるとは…クフフ…何考えているのか」

「それはこっちのセリフだから。

僕は霧のボックスには興味ないんだ。リングはあるけどね。キミは霧の属性だしね…あの集団と群れるかなって思ったただだよ」

「クフフ…なるほど。…僕はあの集団には興味ありません。が、霧の属性として、そのボックスには興味ありますね」

「沢田綱吉の力がある」

「彼のことだ。あの霧属性集団には力を貸さなくとも、僕には貸すでしょうね…」

「……………」。

「しかし、彼らがもう沢田綱吉を狙っているということは」

「ボックスはすでに彼らが持っている」

「…クフフ…面白くありませんね。」

「……………好きにしなよ」

## 前兆

『……っ、どうする』

嵐の守護者、獄寺隼人は頭を悩ませていた…雲の守護者、雲雀恭弥・霧の守護者、六道骸から聞いた霧の属性集団への勧誘の話…謎のボックスの存在、霧の属性集団がそのボックスの巨大な力を手に入るために自分のボス、沢田綱吉を狙っていたこと。彼らの狙いと全ての辻褄は合ったが、これからどう対処して行くか……

「相手は霧属性のスペシャリストです。侮れませんね」

六道骸もいつになく険しい表情をしている。

「とりあえず…雲雀。ボックスについて調べるつもりなんだろう？」

「……………まあね」

「ボックスの件は任せた。……………どう処理するかもな」

「わかった」

と、雲雀恭弥は部屋を出ていった

「あと、骸」

「何でしょう」

「一応、雲雀の動きを見つつ…奴らの対処法を練ってくれ」

「なぜ、雲雀恭弥を見なくてはならないのです」

「まあ雲雀のことだから心配ねーだろうが…念には念を…ってことだな。なんせボックスが謎なんだ。何が起きてもおかしくねーからな」

「……………分かりましたよ」

「慎重に頼むぜ」

「……………獄寺隼人……………」

「なんだよ？」

「……………もし戦闘になったら？」

「?!?!」

「……………。」

「……………。」

「潰せ」

「クフフフ…承知しました。面白くなってきましたね…」

「バカか…笑い事じゃねーよ…」

と、突然会議室のドアが凄まじい音で開いた…

「獄寺!!」

「?!…なんだよ山本、おどかすな」

「ツナが倒れた!!」

「なっ!!」

「?!……………沢田綱吉」

## 崩れゆく大空

「ボス………しっかりして……」

「凧……来ていたのですか」

「?! 骸様!」

クローム髑髏こと、凧は骸の袖を掴み泣き出しそんな声で震えていた……

「ボス………苦しそうな……でも、私! 何もっ」

「しっかりしなさい、凧。沢田綱吉が苦しんでいるのなら、あなたが不安な顔をしてはいけません」

「……でもっ」

「大…丈夫だよ。クローム…」

「?!ボス!」

「十代目っ!」

「ツナ!しっかりしろ」

「みんな……大袈裟だよ…大丈夫大丈夫」

「全然説得力に欠けてますよ。沢田綱吉」

「あははは…骸まで来てたの…」

「待ってる沢田!!!いま我流の晴の炎で極限良くしてやるからなっ  
!」

「ありがとう…!」  
「お兄さん…」

ガオ…

「ナッツ…心配ないよ…ありがとうな」

心配そうにツナのそばから離れないツナのボックス兵器、大空ライオンのナッツに、ツナは優しく声をかけ、オレンジ色に輝くたてがみを撫でる。ナッツも、ツナの温かい手のぬくもりにホッとしたのが顔がほころび始めた。

「ツナ！なんかほしいもんとかあるか？！」

「ありがとう…山本、大丈夫。」

「?!……………おかしいぞ」

「どうした？」

「活性の晴の炎なのにも関わらず、沢田の容態が変わらんぞ!!」

「何?!」

「笹川了平、少しいいですか」

骸は了平を退け、手をツナの額にのせた

『?!』

「これはただの風邪ではありませんね……」

「どついうことだ?! 骸」

「かすかにですが…炎の力を感じます」

「何?! 俺は何も感じなかったぞ!!」

「おそらく、霧の力です。優れた術士でも感じ取るのが困難なほど薄くかけてあります。」

「俺の雨の力の鎮静でなんとかならねーかな？骸」

山本はリングに青い炎を灯しながら言った

「無駄でしょうね。薄いとはいえ、質はとても高い霧の力だ。深い幻覚の世界へ引きずり込もうというのか………ともかく、調和の力を持つ大空の沢田綱吉をここまでですから、強力な力です」

「十代目にこんなこと出来る奴らっ！！」

「霧の属性集団に間違いないですね」

消えゆく雲

「……………」。

「よお！恭弥」

「…………遅いよ跳ね馬」

「おいおい…これでもかなり急いできたんだぜ！！デカくなつたなあ！恭弥、大学だもんな〜そりゃあデカくもなるな」

「君とそんな世間話しによんだ訳じゃないよ。早く情報くれない？」

「相変わらず可愛いくねー弟子だ……謎の霧のボックスの情報提供したのは俺だぞー！」

「頼んでない。君が勝手に話し始めたんでしょ……」

「…………まあいい。キャバローネの方でもかなり警戒されている、俺も気になる一件だから……」

「自分の心配したら？君大空でしょ。」

「いや…奴らの狙いはツナだ。これははっきり言える！」

「……………」

「恭弥…ツナが倒れたらしい…」

「?!」

「獄寺から連絡があったんだ。もしお前に会ったときには一応耳に入れといてくれとのことだった。」

「彼らが関係しているということか……………」

「?!おい!どこ行くんた?恭弥」

「用は済んだからね…帰るんだよ」

「つつたく」

「?!」

本部には返さない。10代ボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥。

「  
…ワオ」

お前は厄介だ。大空とともに消えてもらっ

「恭弥っ!!」

「手を出さないで…跳ね馬。…僕より先に沢田綱吉にちょっかい出したのは君かい？」

……。

「答えがないってことは肯定でとらえるよ。」

…風紀を乱した君は、ここで噛み殺す」

「クピィィ!!」

「いくよ…ロール、  
形態変化」  
カンピオフォルマ

「?!」

愚かな…我々を相手に牙を剥くとは…

「…キュウウ…」

「ロール！」

「……………」

「ロール！…聞こえないのか？！」

「?!」

ガキンッ！！

ほう…流石は最強の守護者、ボックス兵器が使えないと分かると見や、捨てるか…

「……………っ!」

だが、トンファーのみの貴様など恐れるに足りん

「言うね…噛みこたえがありそうでワクワクするよ…」

だが、我々に長居は無用

「?!.....っ!」

「恭弥っ!」

「.....」

「恭弥っ!!!返事しろ!!なぜ攻撃しない!!恭弥っ!」

無駄だよ。跳ね馬ディーノ…いま、雲の守護者の精神はここにはない…

「何?! 恭弥!!」

バタッ

「!?!?.....まさかつ!!恭弥が...恭弥!!」

まずは、1人.....  
.....もうすぐだ.....もうすぐ.....

「恭弥!!!!!!」

— ? ! !

「 ? ! 十代目 ! ! どうしました ? ! 」

「 沢田 ! 」

「 ツナ ! 」

「 はっ、 は …… ひ …… ばり …… さん、 は …… ? 」

「雲雀ならいま出てますが…」

「早…く…ひ、ばり…さんがっ…！」

「ツナ！雲雀がなんだ？！」

「ひ…ばり…さ、んを誰か…！む、かえに……行つて…！」

「なっ！雲雀を？！」

「は…やく…ひ、ばり…さん」

「沢田！安心しろ！極限俺がいく！」

「お兄…さん」

「何も心配するな沢田！大丈夫だ！俺が雲雀をむかえに行くからな！」

「はい…」

「獄寺、山本、行ってくる！沢田を頼んだ」

「先輩！俺の次郎と小次郎連れて行ってくれ！次郎の鼻が利くし、小次郎で空から探せる！！」

「わかった！」

「ひ……ばり……さん」



見えたモノ

「十代目！しっかりして下さいっ！-！」

「…………っ」

「ツナ！…………ギリギリだぜ…」

「ちくしょっ」

「少し落ち着いたらどうです。獄寺隼人」

「っ！！分かってる！」

『分かってないですよ』

骸がそう思ったのと同時に部屋のドアが開いた。

「誰か！！極限に手を貸してくれ！！」

「？！先輩！！………雲雀？！」

「どうした！雲雀！」

笹川了平の肩にはグッタリとし、全く動かない雲の守護者、雲雀恭弥の変わり果てた姿があった…

「雲雀の部屋に運びたい！！山本、獄寺、骸！手を貸せ！」

「……ウソだろ」

とりあえず雲雀を床に伏せたはいいが、他の守護者達の動揺は隠しきれない。…あの10代ボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥がピクリとも動かない。かつて雲雀がここまで絶対的な敗北をしたことはない…“ただ事ではない”…守護者誰もが感じていた。

「ダメだ…やはり俺の晴の炎ではどうにもならん！」

「十代目と同じか」

「ツナはまだ意識がある、けど雲雀はそれすらないぜ！」

「恭弥の精神は持っていかれちゃってるらしい……」

「?!ディーノ!ディーノじゃねーか!」

「跳ね馬、てめえなんでここに…」

「俺も恭弥ともに奴らと対峙してたからさ」

「そういうことか…雲雀は謎の霧のボックスの情報をてめえからもらってたのか」

「ああ。まあ偶然が重なったようなもんだけど…」

「??」

「俺は霧のボックスのことは他のファミリーから聞いたことだ…俺も大空の属性だが、ツナの方が一番危ないと思って、ボックスについて独自に調べてる恭弥に教えたんだ」

「と同時に、雲雀恭弥は獄寺隼人から霧のボックスについて探るよう指示を受けたと」

「そつだ。六道骸」

「…………骸、どう見る」

「跳ね馬ディーノ、さっき“精神は持っていかれた”と言ってましたね」

「ああ…確かにあいつらはそういった。…こいつを見てくれ…」

「?!こいつは!」

「極限に雲雀のボックス兵器、雲ハリネズミではないか!!」

「ロールまでやられちゃったっていうのか。」

「症状が雲雀恭弥と同じですね…」

「ロールがこうなっちゃったとき、恭弥の声は全く届いていなかった。」

「極限にどういうことだ?骸」

「おそらく強い幻覚を見せられているのでしょう。沢田綱吉は大空の力、調和で何とか自ら現実世界とつなぎとめているようですが…雲属性の雲雀恭弥には出来ない」

「それで雲雀の精神は持つてかれちまったってことか」

「骸、なんとかならねーか？」

「目には目を、幻覚には幻覚です」

「雲雀っ!!」

「……………」

「無事みてーだな、雲雀」

「……………っ!!」

「恭弥!まだ起きるな!」

「……………何勝手に、僕の部屋で群れてるの？」

「あははっ！開口一番それかよ！」

「やはりコイツに心配は余計だったな…元気ではないか！雲雀」

「……………」

「雲雀恭弥」

「……………キミに借りを作るなんて…最悪だよ…六道骸」

「あなたがここまでの幻覚にかかるのも珍しい…何があったのです？」

「……………」

「ぶっ倒れていた間、何を見ていたんだ？雲雀」

「……………夢を……………」

「  
「  
「  
? ?  
「  
「  
「

「  
夢を…見ていた…」

見せられたモノ

「夢…だと?!」

「極限にどんな夢だ?」

「……………」

「? 雲雀?」

「最初は……以前全員で見たのと同じ夢だった……」

「「?!」」

「だがその後は……」

「? なんだよ?」

「勿体ぶるな! 極限に気になるぞ!! 雲雀!」

「……沢田綱吉に……」

“殺される”夢を見た

「なっ?！」

「ツ・ツナに……」

「殺されるだ?！」

「なんかの間違いじゃねーか?! 恭弥」

「最初は…確かに疑いたくなるほどだったよ……沢田綱吉から事態に“殺気”なんて感じたことないからね」

「十代目が…殺気?!」

「ツナに限って有り得ねーよ! しかも仲間相手に……」

「うむ! 雲雀ならともかくな……」

「噛み殺すよ…笹川了平……」

「いくら頭で否定しようとも、強い幻覚により嘘が真の如く感じさせられたというわけですか……」

「……………」

「なるほど…厄介ですね。僕ほどの術士なら奴らの幻覚などなんてことありませんが…霧の属性でないあなた方ですと、こつもこつまで追い詰められるとは…」

「……………っ…！」

「おい！まだ動くな雲雀！」

「奴らを噛み殺さなきゃ、目覚めが悪い」

「でたよ…雲雀の悪い癖。」

「雲雀恭弥、今出ても待つてる結果は同じです」

「……………」

「相手はボックス兵器にまで幻覚の手を加えられる。雲ハリネズミまでやられているのです。トンファアのみでは、いくら雲の炎があるとはいえ無謀というもの…」

「とりあえず寝てろ！雲雀。今十代目まで倒れてしまわれてんだ、守護者の俺たちが動いたところで奴らの思いつボだ」

「それは君たちの都合だろ。僕には関係ない」

「雲雀！貴様！」

「まあまあ先輩、雲雀も。身体に障るぜ」

「ではこうしましょう。雲雀恭弥、あなたのボックス兵器の状態は僕がなんとかします。その間、自身の身体を休めるなりして待っていてください。この見代わりは後々で結構」

「……………わかった」

「俺たちは十代目の看病と護衛だ！奴らは所構わずいきなり来やがる。油断すんなよ！」

「」「おう！」「」

## 異変

「十代目、雲雀は大丈夫です。安心して休まれて下さい」

「…そう。あり、がとう…獄寺くん…」

「これしきのこと」

「すまん…沢田、骸いわく、お前にかけられた幻覚は強すぎて極限簡単にどうにかなるものでもないらしい」

「骸が、ロールの状態直したら形態変化カンビオフォルマして見てやるから待っててくれってさ」

「う…ん。俺は、大丈夫…。」

「十代目……」

ガウ…

「ナッツ…心配ないよ…ありがとう…」

「十代目、俺、今日一晩中お傍に付いていますので、何でもおっしやって下さい！」

「うん。……ありがとう……じゃ……お言葉に、甘えようかな……」

「はい。」

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

「……寺くん……獄寺……くん」

「……ん……あ、すいません。寝てました、はい……十代目何でしょう？」

十代目……？

に、逃げて……

?  
!  
!

## 時間

「……っ！じ・十代目……なにを……」

「……」

「十代目ええ！！」

「……」

『クソ！血い出し過ぎた！クラクラしやがる』

「クッ！瓜！！」

ニョーン！

「十代目がおかしい！山本を呼べ！早くっ！！」

ニヨ〜ン…

「俺に構うなっ！…！急げ…！」

ちせん

「?!」

来るべき時が来た…分かるか？時間だよ……ボンゴレ十代目など、  
もはやただの我々の道具だ……

「ボンゴレなめるな……」

?!!

ドカンッ!!

?!! 仕込み爆弾か…この男…自分も死ぬつもりか…

「う……りよ、し行っ……た……か……」

愚かな……ボンゴレ十代目……堅い忠誠心を持つ嵐の守護者を貴様の  
手で葬ってやれ

「……………」

沢田綱吉は従うかの如く…オレンジの炎の灯ったグローブを獄寺隼人に向けた…構えは、？バーナー…

「……じ、じゅう…だいめっ……」

「………オペレーション？」

『クッ！！動けねえ……………そうか……………雲雀の言ってたことが……………分か  
ったぜ……………』

時雨蒼燕流特式十五の型 “雨宿”

「……………」

水の膜が沢田綱吉を覆った…水を操るのは…

「大丈夫か！！獄寺！」

「や…まもと…」

「極限いま治療してやるからな！我流！」

「お……れよりも……じゅうだい……めが、おかしい！」

「……みてーだな……ツナのやつ、獄寺をマジでヤル気だったみたいだぜ……」

バンッ！！

『雨宿をこつも簡単に壊されるとはな……雨の特徴、鎮静で作った俺の完全防御技を……流石はツナだぜ……』

「オペレーション？」

「  
「  
「?  
「  
「

「どうするのだ山本!!俺達では到底、今の沢田には極限太刀打ち  
できんぞ!」

「……………」。

クピィィィ！

「ロール、球針態」

「雲雀！」

『あれは…十年後の雲雀が、ツナの修行のときにやった雲の炎高密度の完全密封空間！！』

「何してるの？山本武、笹川了平、早く獄寺隼人を連れて逃げなよ」

「お…れに…じゅう…だいめを、置いてけっつつのかよっ…！」

「クフフフ、今のあなたでは足手まといです」

「骸！」

「さあ…早く逃げなさい。沢田綱吉は、我々が食い止めます」

「うむ…行くぞ獄寺！」

『クソ！十代目……！』

「先輩！並盛のボンゴレアジトは危険だ！ここは一旦、イタリアの本部にしよう！」

「分かった！」

「小次郎！」

ピィィィ！

「お前は残って、雲雀と骸にイタリア本部にいることを伝達するんだ！2人と一緒に帰って来い」

ドカン！

.....

ピ  
イ  
イ

「球針態が、壊れた……  
ロール、  
形態変化」  
カンビオフォルマ

「ムクロウ、  
形態変化」  
カンビオフォルマ

「沢田綱吉は完全に奴らに操られていますね……」

「そんなこと今までなかった……」

「相手は霧の術士、しかもスペシャリストです。  
……いくら沢田綱吉  
と云えど……」

「バーナー」

「？」

~~~~~

「クッ……！……これが……あなたの夢に見た殺気……ってやつですか！」

「いや……近いけど……まだ、何処か違う。」

「ん〜…確かに、癪ではありますが、？バーナーの出力が完全に
出ききっていない。完全な？バーナーで来られたら、こちら側は防
御する術がない。………マズいですね」

「……………」

「「?!」」

霧の属性集団に操られている沢田綱吉は、雲雀達に背を向け…彼らの元へ歩き始めた

「どこへ行く気だい？沢田綱吉」

「…ボックスの…覚醒のためだ。お前の相手をしている暇ではない…」

その通りだ。沢田綱吉、さあ！共に、行くぞ。あのボックスを開口
するには貴様の炎が必要なのだ

「……………」

「クフフフ、言ってくれますね。…あなた方に用はなくなるとも、こち
らがあるのです…遊んでいてもらいますよ！」

行くぞ。 沢田綱吉

「.....」

「待ちなよ」

「行かせませんよ！」

「……………雲雀、骸」

「「なっ！」」

救出

――10代ボンゴレファミリーイタリア本部――

「獄寺さん!!こ・これは……」

「山本さん!どうなさったのです!ボスは?!」

いきなり重体の獄寺隼人を抱えて帰ってきた山本武と笹川了平に、
イタリア本部の部下達からの質問が絶えない………

「極限説明は後だ!医療器具の準備を急げ!!」

「は、はい!」

ガチャ

?!!

「なっ！」

「雲雀！骸！」

「はあ…はあ…我々も…一度、部屋に入ります…」

「……………」

「雲雀殿！怪我なさっているのですか？！」

「構わないで。大したことじゃない…」

「骸殿！」

「クフフ…心配無用…少し炎を使いすぎただけです。少し休ませて貰いますよ…」

「骸！雲雀！」

「……なんだい？笹川了平」

「獄寺から言伝だ、後で自分の部屋に来てほしいとのことだ」

「……ああ。」 「分かりました」

……獄寺の部屋

ニョーン…

寝ている獄寺の隣では彼のボックス兵器、嵐猫の瓜が心配そうに体を擦り寄せている

コンコン

「獄寺、入るぜ。」

先に入ってきたのは雨の守護者、山本武だ

「
…ああ…」

「大丈夫か？獄寺」

「だいぶな…」

「…ツナの…ことだが…」

「？！じ、十代目は？！」

「起きるな！獄寺、傷口が開いてしまうぞ」

「俺なんてどうだっていいんだよ！十代目は…」

「騒ぐな獄寺。はやる気持ちも分かるが、極限、今は雲雀と骸の話
を聞いてからだ」

「…………っ」

「しかし、ツナに仲間を攻撃させるなんて…ひでー話だ」

普段温厚な山本でさえ、今回のシックファミリーのやり方は許せないらしい…

「うむ…沢田の性格を考えるとかなり酷だ」

「奴らの狙いは……これだ…」

「獄寺…」

「十代目の精神を壊し、倒しやすくしてやがる」

「沢田の天空の特徴、調和を持ってもダメとなるとな…」

「打つ手ねーぜ…」

「もう入っていいかい？ 獄寺隼人」

「雲雀…骸…」

「クフフ…呼び出したのはあなたですが。」

「ああ………雲雀」

「……………」

「俺も…薄れていく意識の中で…十代目の“殺意”をはじめてみた……」

「あなたもですか、獄寺隼人」

「極限どいうことだ?!骸」

「我々も沢田綱吉と対立し、最後の最後に彼の“殺意”を真に受けました」

「僕の雲の防御、六道骸の霧の防御を使っても危うかった」

「ツナのXバーナーか」

「どうするのだ?獄寺……」

「つたりめーだ…十代目を助けに行く……」

「だなっ!」

「うむ。極限!俺達のボス奪還だ!」

「雲雀…骸…」

「「？」」

「てめえらは…どうすんだ？」

「クフフ…みすみす、彼らなどに霧のボックスを渡すわけにはいきませんから」

「彼らを噛み殺ろさないと夜も眠れないからね」

「あははは！雲雀の夜って大変だな！」

「あと沢田綱吉も噛み殺す」

「それはダメだろ！！」

「よし！獄寺！極限ボンゴレ総出で奴らを討つぞ！」

「…まだあと1人たりねえ」

「?!ランボか!」

「けどよ、獄寺…ランボも少しでかくなっただといえまだ小さいぞ? 付いてくるか?」

「大丈夫だ…あのアホ牛は…秘めた電撃を持つ雷の守護者だからな」

ランボ！

「ランボ」

「ランボ！」

「なに？？山本」了平」

日本の沢田綱吉の家へ電話をかけた山本と笹川：電話に出たのは、かつて5才児で小さかった雷の守護者、ランボである。今では、ボンゴレ雷の守護者ということはまだイマイチよく分かっていないようだ、だんだん周りは見えてきたようだ。だが、いまのランボくらい小さかったフウ太はもっと大人びていた……。そう考えるとランボ少し幼いのもかもしれない。

「ランボ！アシはこっちで手配する！今すぐイタリアにあるボンゴレ本部にくるんだ」

「え〜。ヤダぶー！なんでランボさんが〜」

慌てる山本に対して案の定、ランボの返答はゆるいものだ…

「ランボ！これは真剣な話なんだ！ちゃんと聞いてくれ」

「山本、変われ」

了平はそついうと山本から受話器を受け取り話した。

「ランボ！極限俺だ！」

「了平〜！」

「ランボ！極限！俺の話を聞いてくれるか?!」

「うん」

「沢田にもう会えんかもしれない……」

「…え？」

「ランボ……沢田はいま大変なことになっている。このままでは、生……沢田に会えんかもしれないのだ。」

「ツナ？」

「……………そうだ。沢田だ」

「ツナ？」

「……………。」

「…………だ……イヤだ……ツナ……イヤだあああ！！！！」

「「?!」」

「ツナああああ〜！！！」

「ランボ！！！」

「?!！！」

「ボンゴレ本部に來い！極限！俺達と共に沢田を救いに行くぞ！沢田に、会いに行こう！！！」

「いく！！ランボさん……ツナに会いに行く！」

ツーツーツー…

「…切れてしまったぞ」

「さすが先輩っすね！」

「なんだかんだ、ランボの面倒見る機会が多かったからな！」

「よし！獄寺に報告しに行こう。」

「これで…本当に揃うのだな……」

10代ボンゴレファミリーが

シクファミリーVSボンゴレファミリー

「来やがったな…アホ牛」

「ギャハハハ！獄寺ボロボロだもんね！」

ピキ

「まあ…抑えろよ…獄寺…」

「極限、事実だしな」

「っるせ！」

「???…雲雀と骸はどうした？」

「そついえば姿が見えんな」

「骸が奴らのアジトを見つけてくれた。アイツらは先に行かせた」

「おいおい……」

「極限に大丈夫なのか?! 向こうには沢田がいるのだぞ?」

「十代目は後だ。まずはシッケファミリーだけを潰して来いだけでは言っている。」

「なーる!」

「うむ! それならあの2人で事足りるだろうな」

「俺達も行くぞ」

「ここですね。強い力を感じます」

「全く…並盛の森林の中にこんな空間創るなんてね…」

「おそらく…強い幻覚で創られていますね。森林にうまく隠しているつもりでしょうが……クフフ…この僕の目から欺こうなど1000年早い…」

「何でもいいよ…並盛の風紀の汚す奴は、噛み殺す！」

「舞え…ムクロウ、カンピオフォルマ形態変化」

「カンピオフォルマロール、形態変化」

「いまから僕がこの空間に亀裂を入れます。そこを打ち込んで下さい。」

雲雀はうなずく。

「ハッ！」

骸は杖をまわし、狙う空間の点をめがけ切っ先を衝く。

すると、ガラスに亀裂が入るかのごとく、衝いたところから空間が歪んでいく。

「ロール、球針態」

クピイイイイ！

ドカンッ！！

雲雀と雲ハリネズミのロールの攻撃により、完全に空間のシールドは壊された。先は真っ暗闇である。

「……………暗い。」

「明かりは持っていないですよ。」

「別に、アテにしないから」

「クフフフ…言ってくれますね」

「大体、なんでキミと行動しなきゃいけないの？奴らは僕の獲物だ。僕1人で噛み殺す」

「クフフ…手を出すつもりはありませんよ…僕はただ、霧のボックスが手に入ればいい。」

「物好きだよね。キミも」

「「?!」」

「……感じますか、雲雀恭弥」

「……幻覚」

愚かな……

「「?!」」

この空間に入った時点で幻覚にかけられているとは思えないとは、
ボンゴレファミリーもそんなものか…

「「?!」」

「霧のバリアー……」

「割れていく……」

「空間が……」

「ロール、防御だ」

「「っ！間に合わない！」」

「ぐあっ」

「くっ！」

私は霧の属性、シクファミリーの中でも最強の術士……“ルカ”と申します。……とはいっても、すでに聞こえていませんか…

「へえ…君、強いんだ」

なに?!

「僕を退屈させないでよね」

なっ？！私の幻覚空間が！

「私の”？”私達”の間違いでしょ」

いつから気付いていたのですか…

「癪だけど…ボンゴレV Gを持つ、最強最悪の霧の術士がいるからね。うち（ボンゴレ）には……」

六道骸かつ！

「本当に癪だけど」

しかし、分かりませんね。私達は霧の術士…術士の六道骸が相手になるならまだ分かりますが、わざわざ二手に分かれ、1対1を申し込むとは…あなたは幻覚にかかつてはおしまいですよ……

「わかってないのはキミの方さ。」

?!!

「僕のプライドを傷付けたことの重大さをわかってないね」

……この男！なんて炎を…

~~~~~

「やれやれ、早速ですか。喧嘩っ早い人ですね…」

.....

「おや？どうしました？こつもあつさり幻覚空間が破られたことが  
そんなにショックでしたか。」

雲雀恭弥に勝機はない。あの男、死ぬつもりか…

「クフフフ…こちら随分と口調が違いますね」

俺はルカの双子の兄、アンジュだ

「クフフ、天使の名前とは…趣味が悪いですね」

雲雀恭弥は術士でない。術士の我々に勝ち目はないぞ

「クフフフ…術士か術士でないかは雲雀恭弥の問題には成り得ません。」

なに?!

「なにせ、ボンゴレファミリー最強の守護者とうたわれている男だ」

?!!

「癪ですがね……………さあ……………こちらも始めましょうか……………」

## 雲雀恭弥VS霧の術士ルカ

「……………つまらないな……………」

「はぁ……………はぁ……………」

「口で言ってるほど対したことないね……………雲雀恭弥も……………」

「くっ……………」

「本当にボンゴレ最強の守護者なの？術士相手でこの有様なのにさ……」

「……………」

「ボンゴレV.Gを使ってもその程度とはね」

「キミち……」

「なっ  
」!

「しゃべり過ぎだよ」

「?  
」

「嫌いなんだよ。しゃべりながら戦う奴、萎える」

「負け惜しみにしか聞こえない…っよ!!」

ガキン！

雲雀のトンファーが鈍い音を立てる

「…っ！」

「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥。フラフラのクセに！口の減らない奴だよ」

「その呼ばれ方は好きじゃないな……ロール、準備はいいかい？」

「?!」

「キミは、ひつじ雲って見たことあるかい？」

「なっ?!なんだこれは!!」

雲ハリネズミのロールは一匹一匹分裂し、辺り一面に波紋状に広がっている。まるでひつじの羽毛のような形だ…

「これは現在における、雲ハリネズミロールの最大増殖数だよ……その数、1,000」

「?!?!」

「こつこつ風に、雲が波紋状に広がってひつじの羽毛のようにみえる形をひつじ雲という。」

……キミにはよけられるかい？ 1 0 0 0 個のロールの針を。いや……針は背中に無数にあるから 1 0 0 0 以上か……」

「雲雀恭弥、貴様っ！」

「ただこれは最大の攻撃技でもあるから、ロールの増殖の準備になり時間がかかってね……しかもその間、かなりの炎の消費するから、僕自身は無防備になる」

「くっ！」

「けど……」

「やっやめっ！」

「この攻撃から逃げるのはほぼ不可能だよ」

「やめろおおおー！」

ドオン！！！！！

キュ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ

「  
.....  
疲れた。  
眠い  
」

「  
ロール。  
……少し休もう」

到着

「?!」

「クフフフ…どうかしましたか？」

「ルカ……」

「ああ…あなたの可愛い弟は、あのバトルマニアによって噛み殺されてしまったようですね……クフフ、お気の毒に」

「貴様らっ！ボンゴレ！」

「愚かなマフィアと一緒にされたくはありませんね。」

「フン……貴様はボンゴレ組織の継承をしている……貴様はボンゴレの人間だ」

「我々は利害一致の下、動いている。それは沢田綱吉とて同じこと」

「？解せん……10代ボンゴレファミリーは」

「クフフフ…我々の関係を余所者にそう簡単に理解されなくありません…さあ、おしゃべりは此処までとしましょうか…」

「……………」

「クフフフ…すぐに黄泉へとお連れしますよ…僕も忙しいんでね」

……………

「獄寺！ここだぜ！」

「うむ、極限！骸と雲雀の炎のあとを感じるぞ」

「よし、中に入ったらなるべく離れるな。離れたらかなり不利だ」

「OK！」

「了解した」

「アホ牛、てめえは芝生頭と一緒にいろよ」

「わかってるもんね〜！」

× × × × × × × × × ×  
「暗いな…」

「懐中電灯もってるぞ」

「何で持ってたんだよ!」

「さっすが先輩!用意周到っすね」

「つけてもあたりが照らされんぞ?!」

「ってことは、ただの暗闇ってないってことだな」

「ああ…たぶん、霧の幻覚で作られた空間なんだろう。俺達はすでに、奴らの手の中だ…」

「OK!なら…」

次郎！小次郎！形態変化

カンビオフォルマ

「次郎、行くぞ……」

時雨蒼燕流、特式十二の型 “霧雨”

「おお！そうか！山本の対幻覚対策の技を持つてすれば……」

「そういうことです」

「一番、幻覚が弱いところを探し出せるか？」

「……ランボの斜め後ろあたりだ。」

「じゃあ、ランボさんやる！」

「なっ！」

「出来るのか?!ランボ！」

「へへん!ランボさんの新技見せてやるもんね」

おっしーどん!!

「「「すげー久しぶりに見たな……牛井」」」

カンビオフォルマ  
形態変化ー！！

「ランボ、そのVGのヘルメット……どうするんだ？」

「投げるんだもんね！！」

「「「投げる？！！」」」

「ちょ、ちょっと待てアホウ」

「一擊必殺、  
“電砲”  
~~~~~  
!!!!」

バチィィィ！！

「ギャハハハハ！見たかあゝゝ！ランボさんの新技！」

「ま・まさか…ヘルメット投げるとはな…ランボ…」

「極限にすごいぞ！ランボ！暗闇をかつき消したではないか！」

「当然だもんね！」

「ランボ……マジで獄寺死んじゃうよ……」

「????」

「~~~~っ！……このっ！アホ牛っ！……果てる……」

「ぐひゃー!!」

六道骸VS霧の術士、アンジュ

「?!……………おやおや、もたもたしていると邪魔が入りそうですね……こちら早くケリをつけましょう。」

「……つくってんのか?」

「クフフフ……あなたは誰を相手にしているかわかっていない。」

「そっくり返すぜそのセリフ……」

「行きますよ!」

「?!」

骸の造り出す異空間……霧のVGもあるだけあり、強力なものなのは明白だった

『ボスが欲しがる人材なわけだぜ…六道骸…』

「クフフフ…どうしました？早く対処しなければなぶり殺しですよ？」

「なめるなよ」

「?!…これは………」

~~~~~

「歩けど歩けどなんもね〜な〜」

「うむ……」

「…静だ」

「ぐぴゃ〜！」

ランボが転んだ。

「大丈夫か?!ランボ!」

「が〜ま〜ん!」

「何やってんだよ…アホ牛」

「ランボさん悪くないもんね！なんか踏んだんだもんね！」

「何キミ…噛み殺されたいの？」

「雲雀！！」

「極限何しているのだ？！こんなところで！」

「炎使いすぎて疲れたから寝てただけだよ」

「あははは！だからってこんなところで寝るか？！」

「じゃあ…雲雀…お前シツクファミリーをやったのか？」

「無駄だね……」

「?!」

「極限どついうことだ？」

「表に出てきたのは2人だけ。しかも小食動物並で萎えた」

「けど…骸の炎の感じがする。お前ら二手に分かれたのか？」

「僕と彼では目的が違うからね」

「……………」。

「極限どうする？獄寺」

「骸を待つか？」

「いや……雲雀の言うとおりだ。俺達と骸の目的は違う。なら骸を待つのは無意味だ。先を急ごう」

「だな！」

「うむ！沢田が待っている！」

「……………」

――

「…………… 本当にあなたは趣味が悪い」

「そうか？お前のボスに合わせてやっただけだ」

『…………。幻覚でない。とすると、目の前にいるのは…本物の…沢田綱吉か…不味いですね…』

「僕は沢田綱吉に用は無い」

「骸…」

『?!?!』

「構えろ」

「クフフ。沢田綱吉…無意味な闘いをするのですか？」

「……」

「この僕が闘わないと言っている。…にも関わらず、闘うのですか？無意味です」

「関係ない」

「?!」

「構える。骸…構えないのなら、俺からいく」

「……ヤルのですか？同じボンゴレの僕を。」

「……………」

『??動きが止まった』

「……くる……む……くる」

『?!!!』

「じゅめっ……………じゅめ、ん……………む……………くる」

『沢田綱吉が、正氣に戻ったか』

わずかとはいえ……………調和の炎で正氣に戻すとは。さすがはボンゴレ？  
世といったところか……………

「……………骸……………おれ……………」

「……………?!……………」



## ボンゴレ 解散

「くくくでうう！ランボさんもう歩けない」

「はあ?!…てめえな…」

「ランボ！極限！背負ってやる。来い！」

「やったもんね！了々平々」

「さっすが先輩！」

「わりいな…芝生…」

「極限気にするな…ランボが退屈するのも無理ない。かれこれ1時間以上は歩きっぱなしだ…」

「おっかしいな、確かに幻覚は解いたはずだぜ？」

「向こう側が様子を窺ってんだろ。雲雀が奴らの一味をヤツたしたら尚更だ。」

「うむ…監視している側と、されている側では精神的にかなり違う」

「俺達の精神すり減らしてから、最後キてる所で叩くってか？」

「……………」。

「?!おい!あれ!」

「「骸!」!」

「「極限に大丈夫か?!骸!」

「大丈夫です。やられていませんから」

「何があつた？骸」

「…………この闘い…無意味です」

「「なに？！」」

「なに言つてんの？キミ」

「沢田綱吉に会いました」

「「「？！」」」

「彼はかなり彼らに精神を食い尽くされています。僕と会った時は調和の炎で辛うじて正気を保っていましたが、完全に彼らの手の中に落ちるのも時間の問題…」

「だったら尚更、十代目を救うのが俺らの使命だ」

「沢田綱吉は一言」

“ボンゴレには…戻れない”と。

「ツナ……」

「沢田の事だ。仲間である俺達を傷付けたことで相当参っているの  
だろうな……」

「ですね。自分から“手を引いてくれ”、と……」

「それでキミは手を引くのかい？六道骸」

「彼自身に闘う意志がないのです。だから彼らの言いなりになるの  
は明白。なら、我々が戦うことは無意味だ」

「霧のボックスはどうする！」

「沢田がこちら側に落ちるならボックスは手に入れられても空けることが出来ないではないですか……」

「俺は行くぜ」

「獄寺。」

「聞こえなかったのですか？ 獄寺隼人、無意味ですよ。これはボンゴレ？ 世の解散宣言です」

「それは俺が決める」

「沢田綱吉とあなたでは力の差があります」

「確かにな。…だが、今回の件は右腕である俺にも非はある。十代目ばかり辛い思いを背負わして置くわけにもいかね……。……十代目を止められないかもしれねー。下手すりゃ十代目にやられるかもな……。……だが、十代目にやらねんら俺は本望だし、十代目にこんなことやらせてる奴らをぶっ飛ばさなきゃ、俺の腹の虫が収まらねー」

「うむ！同感だ！獄寺！」

「芝生……」

「俺はたとえ1人になっても沢田を救いに行くつもりだ！ファミリのピンチに、この晴の守護者が行かずして誰が行く！！極限！俺の拳で沢田の目を覚まさせてやる！」

「あははは！先輩、ツナ殴る気っすか！？……もちろん、俺も行くぜ……獄寺。操られてるツナだって、俺達見りゃなんとかなるかもだろ？」

「山本……てめー…考え方が軽いんだよ!!」

「そうか？ボンゴレボスとそのボスを守る守護者達の絆はそんなもろくねーって！

「キミって、そういう事サラっと言うところあるよね」

「え・」

「てめえはどうすんだよ…雲雀…」

「何言ってるの？獄寺隼人。僕はまだ霧の属性集団も、沢田綱吉も噛み殺してない。行くに決まってる」

「骸…そういうことだ。お前が手を引くなら、俺達は止めはしない。」

「クフフフ…早死にしに行くつもりらしい。……いいでしょう。付きあいます。」

「行くのか？骸…」

「ボンゴレ？世とその守護者の崩壊…僕にとっては願ったり叶ったりの展開です。せつかくですからこの目で見届けさせてもらいましょう」

「なんだとおお…！極限にプンス力だぞ！骸！」

「あははは！まあまあ先輩、いいじゃねーか！骸も参戦なんだし、心強いぜ」

「僕には関係ないからね。好きにしなよ」

「ランボさん、もう飽きたもんね〜。ツナと早く帰りたい!!」

「決まりだな…これで本当に正真正銘」

“ボンゴレ？世守護者、全員参戦だ”

## 決戦

獄寺をはじめとするツナの守護者たちは暗く、先の見えない道を再び歩き出していた……

「獄寺、戦うのはいいが…極限沢田はどうするのだ？」

「そうだぜ。獄寺、ツナの???バーナー（ダブルイクス）くらったら一溜まりもないって」

「前もって十代目の相手は決めておこう。それ以外の奴は迷わず霧のヤロー共だ」

「うむ…」

「OK！」

「で？誰が沢田綱吉の相手を？」

獄寺隼人の視線の先は……………

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

どうやらボンゴレ守護者共はバカばかりらしいな

ボスの沢田綱吉は我々の手に落ちたのいうのに、死に來たぞ

いいじゃん。最強ボンゴレの守護者をうちの手で葬れたら格好良  
いしさ！！

六道骸もバカだったな…我々と組んでいればボックスも手に入り、  
沢田綱吉も葬れ、最強を欲しいままに出来たというのに……

来てるよ…ボンゴレ…

「おい骸、お前バカ呼ばわりされてるぞ」

「クフフフ…僕が口先の挑発に乗るとでも？」

「あははは！やる気満々だな！骸」

「十分挑発に乗ってるではないか…骸」

「ツナ〜〜ツナ〜〜ツナ〜〜ツナ〜〜ツナ〜〜ツナ〜〜ツナ〜〜ツ  
！」

「うるせーよ!」

「噛み殺されたいの？キミ」

「ぐぴゃー！」

ボンゴレはいつから漫才集団になった

「“余裕”だと言ってもらいてーな」

ふーん

しかし、お前らの相手は我々ではない

「  
「  
「  
「  
?」  
「  
「  
「

「  
あ~~~~~!!  
ツナ~~~~  
!!」

ランボはツナに駆け寄っていつてしまった…

「あ！ランボ！」

「あんのアホ牛！」

『……………』

「ツナ……！どこ行ってたんだよ！早く帰るもんねー！」

「ツナ……？」

「……………」

「なんか言えよー！ツナ……」

「……………」

『シネ』

「ぐびゃー!」

「う・う・う・う…」

「アホ牛が!十代目は操られてるって説明しただろーが!」

「しかし、決まりですね」

「ああ…ツナがランボに手を出すなんて有り得ねー」

「今の沢田は沢田ではない!!」

「行くぞ!」

瓜！形態変化だ（カンビオフォルマ）

次郎、小次郎！形態変化いくぜ  
カンビオフォルマ

我流！極限！形態変化だ！！  
カンビオフォルマ  
ロール、形態変化

舞え、ムクロウ。形態変化カンビオフォルマ

ギュードーン!!

形態変化!! (カンビオフォルマ)

ほお…流石に守護者全員は壮観だな

「だろ？」

「あははは！まーな！」

「うむ！俺達も久しぶりに見たぞ！」

「芝生それは言うな」

「クフフフ…しかとその目で焼き付けておいてもらいたいですね」

「君らはここで、噛み殺されるん……だからっ！！」

雲雀のセリフと同時に、全員の一齐攻撃となった

沢田綱吉の相手は……

「頼んだぞ！雲雀！！」

雲雀恭弥が沢田綱吉の相手だと？

雲が大空を相手にするといふのか？！

無理でしょ！絶対

あの男、死ぬな

「そいつはどうか…」

「負けねーさ。雲雀は…たとえ、ボスでもな！」

「極限！あいつは、雲でも」

「大空すらも隠す入道雲ですからね」

「……………キミと戦えるこの時を楽しみにしてたんだ。 沢田綱吉」

『……………』

「いいね…その殺気」

『雲雀恭弥……』

「はじめよつか……沢田綱吉……」

## 滞る雷

俺の相手は…晴か。

「ランボさんもいるもんね！」

「そうだな、ランボ！極限！晴と雷の最強タッグを見せつけてやるぞー！」

「やるもんね！」

そんなガキになにができる。

「ランボをただのガキだと見ている時点で、霧の属性集団の目もし

れてるな！」

なに？

笹川了平が取り出したのは……10年バズーカ…

「ランボは、ボンゴレ？世、雷の守護者だ！」

「ぐぴゃ？！」

ボンッ！！

「??はい？」

「よお！大人ランボ！」

「笹川氏？これは何事ですか？」

「話は後だ。沢田が危ない。あの男を倒すぞ」

ランボの表情が変わる

「ボスが？」

あのガキが大人に……… とういうカラクリだ

「極限！了平イリュージョンだ！」

くだらん!!

バチ

っ?!……イナズナが

「笹川氏がボスが危ないと言った……お前が関与してるなら、加勢  
しないわけにはいかないんでね」

なるほど……確かに、ただのガキでないことはわかった。

「やれやれ……戦いたくないんだけどなあ」

「そうも言われてられん！行くぞ！ランボ！」

……

『俺の相手はこいつか…』

私の相手は…嵐ですか…

「不服か？」

いえ、逆です。“元”ボンゴレ？世の右腕とお手会わせできるとは

「“元”とは言ってくれんじゃねーか。挑発のつもりか？十代目が居る限り…俺は永遠に十代目の右腕だ」

たとえば、沢田綱吉に自我がなくても？

「?!……………いや……………自我はある。ボンゴレボスをなめんじゃねー」

強がりを……………沢田綱吉はもうこちら側だ。

「……だつたら尚更、俺達”は戦わなきゃならねえ。」

………？

「分からねーだろうな……てめえらみたいなのは……元々、俺達はバラバラだ、ボンゴレにいる理由がな。一致団結なんて、この方やつたことねーよ。終いにゃ、ボスの身体乗っ取るだとか、噛み殺すなんてほざく奴らまでいやがる。」

.....

「だがな………」

？！

「だから、強いんだ…俺達は」

?!.....この男の炎は...ヤバイ!

-----

「.....お?.....獄寺の炎だな?ビリビリするぜ!あいつすげーな!」

随分と余裕だね

「あははは！まーな！  
“余裕だぜ……”」

？！……………ム力つく奴……

「あははは！敵さんにはよく言われる」

キミ雨の守護者でしょ。

「ああ。山本武だ！よろしく頼むぜ」

バカな奴だな。どうせ沢田綱吉は帰って来ないのに…

「分かんねーぜ？そんなの」

分かるよ。沢田綱吉はもう僕ら側についてしまったもん

「あははは！ツナはそこまでヤワじゃねーさ。ボンゴレ？世の名は伊達じゃないぜ」

仮に、自我が戻ったとしても…一度仲間に手をかけたんだ。沢田綱吉がボンゴレに戻るとは思えないな

「へえ…ツナのことまあまあ調べてんのな。確かに！そちらさんの言うとおりだ！……けどな、お前ら、ツナのことばっか調べてて、“俺達”のことは何もわかってねーな……」

何だと？

「けど、まー！俺ら根っこバラバラだから調べても仕方ないか！

……他の奴らは分からねーけど、俺は、“ツナがボス”だからボンゴレにいる。ツナがボンゴレに居なくなるってんなら、俺は居てもしょーがないからな」

じゃ意味ないじゃん。沢田綱吉はもうボンゴレじゃない。

「だが、“俺達”は此処にいる。……俺は、今、ボンゴレ守護者の使命として此処にいるんじゃない。ツナは大切な“仲間”だから、此処に来た！」

仲間？

「ツナは大切な友だからな！ダチが道迷ってんなら、探しに行かないやだろ？」

そんなダチは君らに攻撃したんだよ？

「ツナはそんなことしないからな。操られてるって分かっただけならやることは一つだ！」

無駄だよ。操られてんのを解こうなんてのは

「まあまあ。お話はここまでだ。……………これでもかなりキレてんだぜ……………」

……山本武……スクアーロに続く剣帝と言われてる男か……

……

どういうことだ?!この雷の守護者!

「やれやれ……口で言うほど大したことないなあ」

「やるではないか!ランボ!」

くっ!!なめるなよ!

“霧風”

「構築”を特徴とする霧が、俺の“硬化”には勝てないさ…」

“いかずちの盾”

「おお！ランボ！新技ではないか！」

くそっ！俺は！霧の属性集団“シオン”だ！負けなんてありないんだよ！

「「？！」「」

霧奥義“深山幽谷”

『山本が未来で戦った幻騎士とかいう奴の技に似ている』

「笹川氏……！ど……よう……」

「怯むな！ランボ！極限！頭を使うのだ」

「って、一番出来ないじゃん！」

『確か、骸が前に霧の術士相手に対策的なことを言ってたような……』

…』

—回想—

「相手は霧の術士、まともに向かっていっては相手の思いつきです。」

「…五感を奪われる」

「その通りです。獄寺隼人、術にかけられたということは、五感を司る脳を支配されるということ」

「何か手はないか！骸」

「………そうですね。まず雲雀恭弥ですが、彼は微かながら、未来

の世界で霧の力も見せている。つまり、霧波動を微量ながら持つて  
いるということです。奴らの霧から防御くらいは出来る可能性があ  
ります」

「そんなもの（霧の力）必要ないよ。僕は僕の力で彼らを噛み殺す」

「やれやれ…そう来ると思いましたよ。まあ、雲雀恭弥に関しては  
まず問題ないでしょう。次に山本武」

「ん？」

「霧の術士とは何度か手あわせているはず」

「おう！霧対策は万全だぜ！！」

「あとは、獄寺隼人と笹川了平ですね…」

「情けねえが…今の俺には霧に対抗する術がねえ」

「うむ…こっちは直接攻撃型だからな」

「ですね…霧の術士から言わせてもらうと、物理的攻撃型の相手ほど恰好のいいエサはありませんから」

「極限に何かいい手はないか？骸」

「難しいですね…とりわけ笹川了平。あなたは単純過ぎます…今回の戦いかなり不利です」

「何?! ！極限にハッキリ言ってくれるな!」

「戦線離脱したら?」

「涼しい顔して何言ってる雲雀!」

——回想終了——

「……………」。

「笹川氏……?！」

「ランボ」

「???」

「極限にまづいぞ」

「え?!」

「骸のアドバイスは極限に役に立たなかった」

「どうすんの?!このままじゃ俺たち、この訳わかんない森から出れないじゃん!」

深山幽谷の脱出は不可能……俺がやられない限りな

「もう嫌だああ!」

「落ちてランボ、ようは奴を倒せばよいだけの話だ」

だが、この霧の幻覚で造られた深山幽谷からどうやって俺を見つけ出す？

「くっ」

「笹川氏……！」

さあて……どっちから殺そつか……

「笹川氏……！！なぶり殺しだよ……！」

『極限どうする……ランボは完全に冷静さを失ってしまっている……デタラメに出ても奴の思いつば……。それに、俺のV Gは相手の攻撃を受ければ受けるほどその力をフルに発揮する……向こう側から攻撃して来なければ膠着状態が続く……それは避けたい。』

「もう我慢出来ない……！！」

「ちょっと待て……ランボ！まだ10分も経ってないぞ！」

「サンダーセット！ver.V G」

「待て待て待て……ランボー……！」

「コルナフルミネ  
雷の角！！！」

「バチッバチッバチッ！！」

無駄だ。いくら雷の攻撃といえどその程度ではこの深山幽谷の森からは出られない

「…ぐっ…ランボ！極限俺を殺す気かつ！」

「ダメだもんね…よしもう一回」

「やらんでいいわ！俺まで巻き込んでどうする！」

「だつてえゝじつとしてらんないもんね！」

「気持ちは分かるが落ち着け……俺まで巻き添え食われたのでは……」

『?!!……そうか……その手があるではないか!!!』

「笹川氏？」

「ランボ！前言撤回だ！俺に構わず、攻撃を続ける！」

「え?!」

今度はこっちから行くぞ……

「貴様に攻撃の際は与えん！ランボ！急げ！」

「け、けど、笹川氏！」

「構わん！行け！」

「コルナフルミネ  
雷の角！！！」

コルナフルーミネ  
雷の角！！！！

「ぐっ…まだまだああ！ランボ！」

雷砲！！

『くっ！！さすがは秘められた雷撃を持つ雷の守護者だな…ランボ  
！！極限に効いているぞ！！』

「コルナフルーミネ雷の角からの……………雷砲！」

「ぐあああ  
あ」

どういっつもりだ。笹川了平……………言っているだろう。その程度で深山幽谷は破れない。

「俺は、極限……頭が悪い……からな……突っ込んでいくことしか知らん！」

「さ、笹川氏……」

「攻撃の手を……止めるな！ランボ！」

こ、雷の角！  
コルナフルーミネ

くっ……なんて凄まじい……

『よし！これだけの電気が張り巡らされたんだ……相手も気が気で  
ないはず！！』

こっちもあと一発といったところだな……』

「いけランボ！一番デカいのを食らわせてやれ……！」

フェットロ・コルナ・エレットロ・シヨック  
電撃鉄の角！！！！

「ぐあああつー！！」

『どういうことだ…笹川了平は…明らかに奴自身にもダメージを負っている。』

その身体で深山幽谷の中にいる俺と戦うなんて、不利なのは明白』

出れなくて残念だったな、笹川了平……まあ、これだけ凄まじい雷を放出するのは流石だと誉めるがな……

「さ、笹川氏……」

「心配……するな……ランボ」

「?!」

「シオン、と言ったか…俺は、晴の守護者だ…その使命は…」

逆境を己の拳で砕き、ファミリーを明るく照らす日輪だ

……それが？

「俺には、この拳しかないってことや」

行くぞ!!

晴のVGフルチャージ!!

マキシマム  
極限サンシャインカウンター!!!

ぐ・おおおおおああ！！！！

なんだそれはああ！！！！

ドオオオン

くっ!!.....どこにそんな、力が.....

「これが俺のV Gだ。相手の攻撃を喰らえば喰らうほど、炎エネルギー

ギーのチャージしてぶつけることができる」

…そうか…雷の守護者に、攻撃させて…深山幽谷を脱出、と見せかけて…自身の炎をチャージしていたのか…

「ああ。ランボの“硬化”の雷を何発か喰らってれば、お前もただでは済んでないだろうしな」

布石……だったのか………

「行くぞ……ランボ」

「あいついいの？笹川氏」

「気絶している。目を覚ましたとしても、戦うだけの炎もないだろう」

「あれ？そういえば俺、5才児の俺に戻らない。」

「俺が使った10年バズーカは、入江正一から受け取った“5分効果の壁”を取っ払った新作らしいぞ」

「え・じゃあ何、俺しばらくこのまま？？」

「ああ、極限！共に沢田を助けに行くぞ！！」

「いやだあああ！！！！」

## 雨の守護者 vs 霧の術士セラス

?!! シオン兄……

「ん？どうかしたか？」

…ボンゴレの守護者って…みんな、強いのか？

「まあ、なんてったって、マフィアだからな!!」

キミそつには見えないけど

「だろ？俺もそつ思っ」

？

「ガラじゃねーことやってんなあゝって思っね」

「じゃなんでボンゴレ？世の雨の守護者なんてやってんの？

「仲間を守るためさ」

「仲間？沢田綱吉？」

「ツナだけじゃねーさ！他のみんなもな！」

「他の守護者も強いんでしょ？守る必要なんてなくない？」

戦いを清算し、全てを洗い流す鎮魂歌の雨

どういふこと？

「戦うつて、得られるものたくさんあるけど…失うものも同時にある。俺は、仲間の……何か失った時の辛い顔は絶対見たくねーんだ。俺は、仲間に辛い顔させないために…俺自身も、悔いのない戦いをするために…それはすなわち、全力で仲間を守ること。戦いを清算

すること。それが……雨の守護者である俺の使命だ……」

……。

「だから俺はお前らを許さねー。」

?!

「ツナのあんな辛そうな顔をさせた、いや…ツナだけじゃねーな…俺の仲間みんなを苦しめたお前らは、絶対に許さねー…」

じゃ…………ヤルかい??この僕を

「……………」。

時雨蒼燕流特式十二の型左太刀“霧雨”

『?!はい!……けど』

よけられる速さだよ。山本武。

だが、霧雨の刃の1つが、敵の腕を掠めた…

「…………名前」

？  
？

「名前なんていうんだ？」

そんなの聞いてどうすんの？

「戦った相手の名前くらいは知っておくさ」

知ってもどうせしょうがないじゃん。  
今日がボンゴレの最後なんだからさ

『?!風か!』

“霧の突きの舞”

「.....。」

時雨蒼燕流功式八の型  
“篠突く雨”

ドッ！！！！！

ちっ！  
“霧の眩暈の舞”

.....

『なんもないな……』

「どうした？不発か？」

目に見えるものだけを造り出すのが霧の術士ではない……

『?..?』

なにか匂わないか？

『?..!やべ..!』

遅い

“霧の突きの舞”

シュツシュツシュツシュ

トバンッ！

けたたましい音とともに土埃が舞う……

「ゴホッ！ゴホ……痛ッ！」

霧の眩暈の舞は、目に見えない嗅覚を利用し…脳をジワリと支配していく……一度この匂いを嗅げば、もう逃れはしないぞ

『やべな……これは……視界が……揺らぐ……頭が……いてえ……』

「…………。へへへ！そうだな…次郎、小次郎…」

「  
」

「?!」

「  
」

ザア………

?!!………雨……?

「…危ねえ！危ねえ！俺は、雨の守護者だ。こんなカラツカラの渴ききつた地じゃ、俺自身も渴ききつちまうところだった！」

『???何を言ってるこの男』

すでに視覚も、聴覚も五感ほぼ支配されているはず……なぜ……  
……笑ってられるっ!!!!

山本武!!

時雨蒼燕流特式十二の型右太刀“斬雨”

ドシュッ！！！

？！！なっ……に！！  
な……なぜ！！攻撃が出来る！

「最初に放った左太刀“霧雨”……ありや攻撃したんじゃない、  
霧相手のための下準備だ。」

何???

「俺のボックス兵器は2匹いてな！まずは雨犬、つーか秋田犬“次郎”こいつはすげー鼻が効くんだ！！霧雨は、次郎が相手を嗅ぐために放った」

?!!

「……そうか…僕は微かとはいえ、奴の最初の斬撃に触れた………奴のボックス兵器が僕の位置を把握出来るわけか……」

「あとは、次郎“達”に任せるだけだ。たとえ…俺が使いもんにならなくなったとしてもな！」

ちっ！

「“舞台”も整ったしな！！」

スウツ…

何?!!

『目を瞑った!!だと?!』

……るなよ……っ!

なめるなよ！！！！

山本武！！！！

霧の死の舞！！！！

バシャ！！

時雨蒼燕流守式式の型  
逆巻く雨

ザアアアン……………

『クソ！！水がつ！！………水？………？！！しまった！！』

「気づいたみたいだな………だが、遅いぜ………小次郎！」

時雨蒼燕流特式十の型  
スコントロ・ディ・ローンディネ  
燕特攻！！！！

サバアアアアン!!!

『……………この男……………霧の術士相手の戦いに……………慣れてやがる  
っ!』

「こいつが2匹目のボックス兵器、雨燕“小次郎”だ。地に雨を降  
らせ、“俺の戦い”をさせてくれる。」

.....。

「最後にもう一度聞<sup>き</sup>くぜ.....名は？」

「.....セラス.....」

「……そうか！久々にゾクツとした戦いだっただぜ！サンキューなっ  
！」

「……ヤレよ」

「ん？」

「ま……け……たんだ……殺し……て……い……け……」

「俺はお前らを殺しにきたんじゃない。ツナを助けに来たんだ。それ、」

“女”に手を出す訳にはいかねーだろ

『?!.....気づいて.....』

「お疲れさん！次郎、小次郎！

.....さて、他の連中はどうしたかな。」

## 怒涛の嵐の守護者

『ちっ！どいつもこいつもサラッと終わらせやがって。雲雀のこと考えてんのか？』

しかし、そう語る嵐の守護者…獄寺隼人の足元には、対戦相手の霧の属性集団の1人がころがっている……

「まっ。人の事言えねーか……」

『何なんだ…この男…聞いてないぞ！！ボスから聞いていた要注意人物は…霧を操る六道骸とボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥のみだった！！…話が違う！』

「？！なんだ。まだ息があんのか。タフだな…手加減はナシだったんだけどな…」

……っ！貴様！嵐の守護者…獄寺隼人だろ…

「ああ。」

ぐっ！……クソ！聞いて…ねーぞ！ボスからは…六道と雲雀のみを……マークしておけ、と…言わされて…なんだ！

「はっ！なめんじゃねー。俺はボンゴレ？世の右腕だ…負けは許されねーんだよ」

ぐっ！

―常に攻撃の核となり、休むこと無い怒涛の攻撃―

「これが…俺の使命だ。周りの奴らが決着つけてきてんだ。俺だけチンタラやってられるかよ」

何故だ！なぜ！……霧の幻術が……効かなかった！！！！

「ああ？なんだてめえ、気付いてねーのか。俺は端っから、てめーなんか見て戦ってねーよ」

？！なん…だと…

「俺のVGには、ターゲット的まで飛距離を測るサングラスがついてるが、今回ばかりは少し細工して通常より視界視野を半分以下した。」

半分以上……だと?!!

「ま、ほとんど見えてねーわ!」

そ……それで……どうやって……

「“相棒”とだ」

!  
!

グ  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ウ  
ウ

?  
!  
!

静寂な空気から微かに聞こえてきたのは、獣のうめき声だった……

ダンッ！！！

ガアアアアア！！！！

なっ！！

「俺のボックス兵器の嵐猫の瓜だ。」

『でかい…』

「通常はもつと小さいせえ子猫だ……以前までは、晴の守護者の“活性”の炎が無ければ、デカくすることが出来なかったが……まあ、いつでも晴の守護者が側にいるわけでもねーからな。俺の力で、始めからデカくすることは出来ねーかって策をねったんだ」

獄寺はそう語りながら、身体に寄り添う瓜の狭い額を撫でる。撫でられた巨大な瓜はとても嬉しそうだ…

「“ある理由”で、俺には嵐以外に、雨、晴、雲、雷と…他の属性の波動を持つてる事に気が付いてな…もしかしたら…って思ったら案外出来たって訳だ。」

そつ…獄寺は未来の戦いにおいての修行で、10年後の獄寺隼人自

身の武器である“スイステーマC・A・I”の解読の結果、自分には、嵐以外にも4つの波動を持っていることに気が付いたのだ。

「とはいえ、あん時はそれぞれの波動を出すためのリングがあったから簡単に出せたが…今回は嵐のリングで他の属性の波動出さなきゃなんなかったから苦労したかな……」

だが…納得できない！その嵐猫を付いているとはいえ…我々霧の属性集団の…霧の幻術から免れる…方法など！！

「まあ、瓜も多少攻撃はさせていたが、こいつは大体、お前の位置を俺に教えてただけだ」

なに?!お前は、視界ほぼ0のはず!!

「ああ。だから風をよんだ」

か…ぜ…だと?

「瓜の巨大な炎の動き、におい、声、風向き、これらを感知し、総

計して位置を把握し攻撃していた。」

『なん…という…信頼の上のコンビネーション……いや…驚くべきは、この男の緻密に計算されつくされた……戦闘センスか……味方の風をよむとは……嵐の守護者と呼ぶに相応しい……』

「もう一つの鍵は、“雨の属性”だ」

なに？

「攻撃の際に雨の属性の炎を埋め込んで攻撃した。そして、雨の属性の性質は“沈静”だ」

?!!

「……………気が付いたみてーだな。お前に直接当たれば儲けもん…仮に外れても、空気中に分散された雨の炎は確実に空間を沈静していく。」

お前が幻術をかけてこようが、幻術の陰に隠れようが…沈静された空間じゃ、完璧なお前の幻術空間とはズレが生じる…あとは、ズ

レの部分を攻撃すれりゃあボロが出るって訳だ。」

それは、未来のチョイス戦で、雨の守護者山本武が、霧の術士幻騎士の幻術空間から幻騎士を見つけ出し、勝敗を分ける攻撃へと転じれた作戦であった。

獄寺にとつて…未来での激闘は、確実に彼の嵐の守護者としての…ボンゴレ？世の右腕としての器を大きくしたものだった。

10年後の獄寺隼人は、ボンゴレ？世の右腕として恐れられる存在になるが、今の獄寺隼人は確実に、10年後の自身へと近づいていた……

『なん……という……男だ……かな……わない……』

?!!

獄寺隼人は、絶望に打ちひしがれていた敵の霧の術士のすぐ目の前に爆弾（B o m b）をむけた……すでに導火線に、火は灯されている

ま……て……まで……

「言ったる……手加減ナシだ……」

……っ……まっ！

ドッ……！

「命乞いすんならはじめから十代目に目え付けんじゃねーよ」

「獄寺！」

「?!?!」

「獄寺！極限無事か!!」

「獄寺氏~~~~~!!」

「山本！芝生！来んの遅せ……………?!なんでアホ牛10年後なんだよ……………」

「?!?!ひゃあつ!!」

「!?!…………おいおい…獄寺……………」

「……うわっ……極限加減無しだな！」

「……ったりめーだ。お前らこそ、相変わらず甘めえな……」

「あははは！まーな！」

「だが、情けはかけておらんぞ！」

「ったく」

『………そういや、奴の名前聞いてねーな………まっいいか………』

「獄寺……どっする」

「……………」

“骸の所に行くぞ”

雲雀恭弥という男

「クフフフ……」

何がおかしい……

「また貴方ですか……」

「霧の術士、アンジュだ……」

「また沢田綱吉に戦いを妨げられるのは遠慮しますね」

「安心しろ。今回は俺が直々に相手する……沢田綱吉の相手は、雲雀恭弥だ……」

「……まあ…ならいいでしょう。しかし、気になりますねえ…沢田綱吉と雲雀恭弥の対戦カードは」

「沢田綱吉はこちら側だ…雲雀恭弥の負けは確実だ」

「先ほどもいいましたが、雲雀恭弥を甘く見てはいけない」

「随分かっているな。お前ほどの術士が」

「雲雀恭弥は、ボンゴレ最強の守護者。

雲は、“如何なる天候”であろうと存在する。―常に独自の立場を守り抜いてこそ、雲。―」

「誰とも馴れ合い孤高の浮き雲」

「?!」

「独自の立場からファミリーを守る!」

「極限!それが雲雀の使命だ!」

「…獄寺隼人…山本武…笹川了平…これはこれは…守護者勢揃いは」

「ちょっと…このランボさん完全に流したでしょ…今。」

「やれやれ…沢田綱吉がいらないと思えば、今度はあなた方ですか…僕は、1人で戦いを楽しみたいのですが」

「とっとと終わらせて十代目の所に行く」

「だな！」

「うむ。雲雀ばかりに任せる訳にはいかんからな！」

「雲雀恭弥の元には、沢田綱吉だけでない。我々のボスもいる」

「「「「?!」「」「」」

「クフフフ…やっとその名が出てきましたね」

「雲雀が好きそうな展開だな!!」

「あいつの思考は極限に理解出来んからな!」

「……理解出来ないのは貴様らだ。沢田綱吉もいる。我々のボスもいる。これだけ聞いて…なぜ誰一人雲雀恭弥の元へ行かない?!死ぬぞ。雲雀恭弥は……」

「あははは!俺たち雲雀のそこ行ったら逆に俺たちが雲雀に噛み殺されちまうよ!」

「？」

「沢田綱吉は雲雀恭弥に譲る」これが今回の策ですから

「はあ…その条件でないと雲雀のやろつ、今回の戦い自体出ないと  
言いかねなかったからな…」

「さっきも言ったであろう…雲は、誰とも馴れ合ってはいけない  
……たとえ、晴れであろうと雲は在るものだ」

「雨は、雲があるから降るからな！」

「……雷も。」

「霧が出ようと…」

「嵐になろうと……雲は“流される”事なく空にいたくはならない。雲には、常に過酷な状況がまわり付く……だが、それが雲の存在意義だ。雲雀の奴もそれはよく分かってんだ」

「過酷になればなるほど……強くなるだ？！  
……………」

「だが……雲が“自由に”浮いていられる訳」

“大空”<sup>が</sup>在るからだ

?!!

「クフフフ……さあ……自分の心配をした方がいい……霧の術士アン  
ジュ……」

「……っちいいい！……！」

『雲だけじゃねえ！  
雨だって！』

『晴れだって！』

『雷だって！』

『霧だって』

『嵐だって “ 大空 ” が在るから……………十代目っ！！』

「大空を頼む……ボンゴレ最強の雲の守護者、雲雀恭弥！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4318v/>

---

10代ボンゴレファミリー解散？！

2011年10月27日06時23分発行